



414
A 868



東亞會員某等謹テ伯爵大隈閣下ニ白
 ス九月二十一日北京ニ政變アリ改革ニ志スノ士
 概ニ縛ニ就ク幸ニ康有爲ハ英國商船ニ投シ
 テ逃レ上海ニ到リテ將ニ捕吏ノ手ニ陥ラントセシモ
 英國領事ノ救護ニ頼リテ纒ニ脱スルヲ得タリ又張
 蔭桓ハ康ヲ推舉シタルノ故ヲ以テ將ニ死刑ニ處セ
 ラレントセシモ各國公使ノ忠言ト伊藤侯ノ盡力
 トニ依リテ之ヲ免レタリト謂ハ某等ノ最モ喜ブ所
 ナリ然ルニ某等ノ關心ニ堪ヘサルハ梁啓超康廣仁
 等ノ志士ガ猶ホ縲絏ノ中ニ呻吟スルコトニ在リ梁

大正十一年四月
 大隈伯爵寄贈

2758



等ハ實ニ忠勇義烈ノ徒夙ニ支那ノ復興ヲ決テ自
ラ任シ拮据經營スル所アリ偶々其為大所時ト相容
ス將ニ罪ニ問ヒントス某等深ク彼等ノ誠意正心ニ
社稷ノ為メニ謀リテ名利ノ為メニ謀ラサルノ士ナルコトヲ知
レリ若シ清國ノ律例ニ照シテ強テ彼等ノ罪名ヲ求
メハ之ヲ戮スルノ辭ヲ藉ルニ敢テ難カラセリナリ或ハ朋黨
比周處士橫議舊章ヲ紊亂シテ民心ヲ盪惑スト
稱セハ敢テ明晰ノ證據ヲ舉ケスト雖モ又嚴格ナル裁
判ヲ經スト雖モ彼等死ニ處セリノ不幸ヲ見山張
蔭桓ノ如キハ大臣ノ顯職ニ在リ固ヨリ之ヲ庇護

スルノ人ニ乏シカテスト雖モ梁等ニ至リハ四面皆敵
中ニ在リテ衆怒ノ萃マル所トナル恐クハ救援ヲ得ヘカ
シ抑々梁啓超康廣仁等ハ東亞會ノ會員タリ
某等朋友ノ義ニ於テ彼等ノ冤ヲ蒙リテ刑戮ニ斃
セントスルヲ坐視スル能ハズ殊ニ清國ノ刑辟ハ慘酷ニシ
テ單ニ官制ノ改革ヲ圖リタル者ニ擬スルニ斬首ノ極刑
ヲ以テス今某等ヲシテ電馳其難ニ赴カシメントスルモ千
里懸隔或ハ及バザラシトヲ恐ル且ツ某等微力ニシ
テ到底清國政府ヲ動カスニ足ニヤルナリ若シ幸ニ
シテ閣下之ヲ救護スルニ意アルハ唯一舉手一投

足ノ勞ノミ而カモ某等ノ今閣下ニ望ム所ハ單ニ
彼政府ニ忠言ヲ爲シテ梁等ノ罰ヲ緩和セシム
ルヲ得バ則チ足レリ某等ハ閣下ガ人道ニ鑑ミ正義
ニ照シテ無辜徒ヲ殛スルヲ坐視スル人ニ非ルヲ
知ル閣下豈ニ獨リ清國ノ志士ニ薄キ者ナランヤ
然リト雖モ英國ノ清人ニ厚キ先ツ志士ノ遁竄セシ
者ヲ庇シ并セテ滿人ノ意ヲ一時ニ快クセントスルヲ
抑止セリ頃來清國ハ我國ノ文化ヲ慕ヒテ頻
ニ同情ヲ寄スト稱ス是レ氣運ノ然ラシムル所ナリ
ト云ヘハ當局ノ措置宜シキヲ得タルニ由ラズン

ハ非ス今若シ彼邦志士ノ困厄ヲ傍觀シテ一
旦其心ヲ失ハバ彼等ハ將ニ我邦ヲ去リテ泰西諸
國ニ就カントス茲ニ至リテ日清戰爭以來漸ク挽
回シタリシ敦誼輯睦モ亦タ冷卻シテ再々温マルノ
期ナカラン某等豈ニ獨リ朋友ノ私情ニ戀々トシテ彼
等ノ救護ヲ請フモノナレヤ惟タ彼等ヲ救護スルハ
即チ我邦ノ爲メ必ズ爲サル可カラサルノ擧タルコトナ
信スル也閣下躬大職ニ膺ル願クハ直チニ北京公
使館ニ打電シテ一刻モ速ニ梁等ノ刑ヲ緩和シ
若シ得ベクハ之ヲ全免セシムルニ力ヲ致サントナ

若シ閣下ニシテ無爲ヲ以テ本領トナシ清國ヲ
視ルコト潰瘍ノ如ク一ニ之ニ觸レサルヲ以テ上策
トナハバ清國ヲシテ心ヲ我邦ニ寄セシムル機ハ既
ニ去レリ萬事休ス某等亦何ツカ言ハシヤ言辭
粗笨未タ其意ヲ盡ス能ハス惟タ閣下微衷
ヲ諒察ニシテ某等ノ希望ヲ容レハ當ニ某等ノ
幸ノミナラズ實ニ國家ノ万福ナリ某等頓首再拜

東亞會總代

安東俊明

村井啓太郎

明治三十一年十月二日

佐藤 宏

伯爵大隈重信閣下



白鶴大藥重訂附

附錄